

佐野正巳さんのこと

——古書と風呂敷包のスタイル——

高野 繁 男

個々人に備わったスタイルがある。育った時代からくるもの、職業からくるもの、自分の専門からくるもの、とりわけ、専門からくるものは、その人の価値観や美意識を含んでいるのでインパクトをもつ。

佐野さんが話しかけてくるときは、決まって大事そうに風呂敷包を持っていた。それが、佐野さんのスタイルであった。風呂敷包を机の上に丁寧に置くと、おもむろに結びをどく。中には、たいてい虫食いで穴のあいた和とじの古書が包まれていた。早速、講釈がはじまるが、これがまた佐野さんのスタイルになっていた。先に定年退職された前川さんも一緒に、佐野さんと何度か旅をしたが、そのときもこの古書を持参された。

前川さんは近代文学の専攻で、筆者は近代日本語の専攻である。ふたりとも古書に関心がないわけではない。前川さんは笑顔で講釈を聴いていた。筆者の方は、佐野さんのこよなく愛してやまない江戸時代の古書・古文書に不案内というか、自分の研究に直接つながらないので、ときには退屈した。これが幕末や明治期の洋学資料であつたら、

筆者の目の色が変わったであろう。ともかく、佐野さんは、江戸の国学書をよくご存じであるとともに、それらの古書の大の愛好家であった。

これは、いわば自分が専攻した専門がスタイルになったものである。自分の専門に規制されたともいえるが、その規制が、何よりも佐野さんが、この分野のまぎれもない専門家であったことを証明している。『松江藩学芸史の研究』（昭和五六年刊）は、まさに、このスタイルが完成させたものである。出版記念会で、この風呂敷包のことを話題にしたが、佐野さんは、はにかみながらまんざらでもない笑顔を見せた。ご本人も、このスタイルがお気に入りだったようである。

佐野さんと筆者は、同じ年度に定年退職するはずであった。年齢を基準にすれば、佐野さんと筆者には、いくつかの共通点があった。たとえば、敗戦の頹廢を新しい時代の夢として、それを自分の将来の目標において研究に励んできたことが何度も話題に出た。そんなとき、前川さんは、外地にいて引き揚げ者となり、自分の研究がずたずたになったとおどけてみせた。二人は申し合わせて、その後、この話はしないことにしたのを覚えている。

佐野さんも、中国からの引き揚げと聞くと、まだ小学生であった。ともかく、その成果がスタイルを形成するまでにいたったのであるから、佐野さん自身も、ご自分の生涯をある程度評価していたのではないかと。

葬儀で、ご挨拶された息子さんを膝の上で遊ばせていたのを思い出す。病院のベッドであった。心臓発作で入院されたのをお見舞いに伺ったときのことである。その後は、この病を氣遣つての研究生活であった。

早すぎたご逝去であった。残念だったと思う。心からご冥福をお祈りする。